

わかうなること、世にあるまじきことなれど、げにさのみこそあれなど、哀がり聞え給て、かうさはがしげにはべめるを、このあそんさぶらへばと、思たまへゆづりてなど、御せうそこ聞え給、みちすがらいりもみするかせなれど、うるはしく物し給ふ君にて、三條の宮と、六條院とに参りて、御らんせられ給はぬ日なし、うちの御物いみなどに、えさらすこもり給べき日より、ほかはいそがしきおほやけどと、節會などのいとまいるべく、ことまげきにあはせても、まづこの院にまいり、みやよりぞいで給ければ、ましてけふかゝる空のけしきにより、風のさきにあくがれありき給も、あはれにみゆ、みやいとうれしくたのもしと、まちうけ給て、こゝらのよはひに、まだかくさはがしき野分にこそあはざりつれと、たゞわな、きにわな、き給、おほきなる木のゑだなどを、をる、おともいとうたてあり、おとゞのかはらさへのこるまじう吹ちらすに、○下略

〔枕草子〕

野分の又の日こそいみじう衰におほゆれ、たてじとみすいがいなごのふしなみたる

に、せんざいども心ぐるしげ也、おほきなる木どもたふれ、枝など吹をられたるだにをしきに、萩女郎花などのうへによるほひはひふせるいとおもはず也、かうしのつぼなどに、さときはをこ

とさらに去たらんやうに、こまぐと吹入たるこそ、あらかあつる風のまわざともおほえね、いと

とききぬのうはぐもりたるに、くちばのおり物、うす物などのこうちききて、まことしくきよ

げなる人の、よるは風のさはぎに寢覺つれば、久しうねおきたるまゝに、鏡うち見ても、やよりす

こしゐざり出たる、髪は風に吹まよはされてすこしうちふくだみたるが、かたにかゝりたるほ

ど、まことにめでたし、物あはれなるけしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちいさふはあ

らねど、わざとおとななどは見えぬが、すこしのひとへのいみじうほころびたる、花もかへりぬ

れなどしたる、うすいろのとのゐ物をきて、かみはをばなのやうなるそぎすゑも、たけばかりは

きぬのすそにはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる、わらはへのわかき人のねごめに